



異世界を制御魔法で 切り開け！ 5

α L P H α L I G H T

佐竹アキノリ

Akinori Satake



アルファライト文庫





セシリア

フェリシアの妹。
自然精霊教の崇める
“大精霊”。

バルトロ

遙か太古より存在する
第一盟主。
その強大な力で
世界を滅ぼそうとする。

王太子

飄々とした態度で
エヴァンを手助けする
ハンフリー王国の王太子。

フェリシア

エヴァンに赤い瞳の
左目と予言を与え、
過去の大使を果たそうと
画策する謎の女。

フィオナ

カール・リンドの
創造物にして
原初の亜人であり、
亜人の“神”たる存在。

リンドブルム

伝説の魔術師
カール・リンドに作られた
ゴーレムにして第三盟主。

エヴァン・ダグラス

制御魔法を駆使する主人公。
竜の鱗、大精霊の左目、
悪魔の右腕を持ち、
過酷なる運命に立ち向かう。

セラフィナ

エヴァンに付き従う
獣人の女の子。
時空を操る魔法に
高い適性を持つ。

主な
登場人物
Main Characters

1

西へと向かう船があった。

帆はところどころ破れ、船体には補修した跡がいくつもあり、いかにもおんぼろに見える。だが、ハンフリー王国の国籍を示す旗だけは汚れもなく、誇らしげに翻っていた。

その船が港に着くなり、すぐさま飛び出した少年少女の姿がある。彼ら——エヴァンとセラフィナは辺りを見回して、ひと息吐いた。

「これが西の大陸か。ようやく辿り着いたね」

「海のと真ん中に投げ出されたらどうしようと思いましたが、無事に到着してなによりです」

セラフィナがそう言って笑うのには理由があった。

南の方では魔物が流れてきて混乱に陥っているという話があったが、彼らの船旅においても、その被害は付き物だったのだ。もちろん、どこも船を出さない状況で無理に頼み込んで出してもらったのだから文句の一つも言いうるが、ない。

船員たちと別れると、エヴァンは早速街中へと足を踏み入れた。

この大陸最北の国、ヤンセン公国はハンフリー王国と緯度がほとんど変わらないため、気温はそこまで変化はない。一方、陸部と沿岸部を区切る国境にもなっている南北に走る山脈が、上昇気流と共に雨をもたらし、温暖湿潤な気候であった。

湿度の高さや吹き付ける潮風、そして腐食に強い石造りの家々など、ハンフリーとの違いを実感しながら、エヴァンは今後の予定を立てていく。

帰りはこちらにいるハンフリー大使のところにに行けば、船を出してもらえることになっているため、まずはそちらに挨拶に伺うことにした。西大陸の現状を尋ねるのにも都合がよい。

街中は所狭しと店が並んでおり、東の大陸とは果物などもずいぶん違っている。しかし、大々的に売り出されているのは、ハンフリーから輸入されたものが多い。もう少し南に行けば、メランデル王国から輸入されたものが多くなるのかもしれない。

水産資源が豊富らしく、川魚と海魚、どちらもあちこちで売られていた。水揚げされたばかりらしい魚を焼く香ばしい匂いが出店から漂っていると、エヴァンはいつものように買い食いを始めるのだった。

焼きたての魚の表面は程よく焼き色が付き、パリパリとしている。一本の串に、セラフイナと二人で齧り付くと、中から旨味のぎゅっと濃縮された天然の脂が溢れ出す。熱さと言さで、口の中にある魚の身が躍る。

機嫌よく動くセラフイナの尻尾を見ているうちに、大使館の場所が見えてくる。エヴァンの来訪は予告されてはいなかったが、応接担当の男性にすぐ出迎えられた。

客室はハンフリーの装飾品などが置かれているため、あまり異国に來たという実感はない。もっとも、ダグラスの屋敷にはそんな高級調度品は存在しなかったため、やはり違和感がないわけではないのだが。

二人がやってきた目的は、過去の真実を知るべく、セラフイナの故国である亜人の国を訪れることだ。この国における滞在日数など予定を告げた後、本題である西大陸の情報について尋ねる。

男性は観光客の相手をすることも多いのか、慣れた口調で説明をしてくれた。

「まず沿岸諸国に共通しているのは、貿易によって栄えたということです。そのうち沿岸諸国連盟に加盟している五か国は、西大陸の流通を牛耳っております。ですが、沿岸の国であるとはいえ、南の大国ガビノ帝国だけはその連盟に所属しておりません」

ガビノ帝国は西の大陸では他国を遥かに凌ぐ力を持っており、連盟に加入する必要もないということなのだろう。

その強大さゆえに、帝国が大陸の東に存在していなかったことは、この世界の運命を大きく変えたと言われているらしい。もし、東の海岸線に面する領土を有していれば、間違はなくバルトロ王国を攻めていただろう。そして世界はかつてないほどの大乱を迎えるこ

とになったはずだ。

(……第二盟主の住まう地か)

エヴァンは布で隠されている右手に視線を落とした。制御魔法の使い手カール・リンズの死地で与えられた悪魔の腕と、第二盟主は無関係ではない。カールに作られたゴーレムであり今はマティアス公国の守護者であるリンドルムは、その腕を第二盟主のものだと言っていた。

そしてエヴァンは、その腕を龍の剣で切断できなかったことを思い出す。それほど強靱な肉体ならば、いかにすれば打ち倒せるというのか。

考えていると、男性が続きを話してもよいものか思案しているようだったので、エヴァンは続きを促した。

「北西部部分には亜人たちが住まう国々がございます。大国ではありませんが、迫害されてきた歴史から、どれほど内部で争っているようと、外敵が現れたときには協力して追い払うと言われております。その力はガビノ帝国にも匹敵するそうです」

そこがエヴァンの目的の地ということになるだろう。しかし、話を聞いている限りでは、亜人たちが尻尾もないエヴァンを受け入れてくれるかどうかは分からなかった。

それから南西部においては、ガビノ帝国と亜人たちの国の間に連邦国家がある。強大な両国に対抗すべく結成されたもので、西大陸では第三位の国力を誇っているそうだ。

そうした情報を一気に提示されて、エヴァンはゆっくりと吟味を始める。

地理に関して要約すれば、南に強大なガビノ帝国があり、北西に亜人の国がある。そして東側に沿岸諸国があり、それぞれの間を埋めるように内陸国が存在している。

亜人たちの国に行くととなると、内陸国を通っていくことになるが、できるだけ面倒事のないルートがいい。

「戦争や種族間における対立などどのようなになっていますか？ 避けておいた方がいい地域などがありますか？」

「そうですね……大陸中で対立が強まっている感じはあります。沿岸諸国と内陸国においては利益の奪い合いが起きていますし、内陸国と亜人の国では十数年前の事件からますます関係は悪化していると言えるでしょう。また、あまり大きな声では言えませんが、ガビノ帝国が周辺諸国の制圧に乗り出す可能性が高まっていると見られています」

「十数年前の事件とは……？」

さも当然のように語られたそれについて、エヴァンが尋ねる。男性は「おや、ご存じないですか。失礼しました」と頭を下げた。

「亜人との関係が悪化した原因となった事件です。それまでは比較的良好な関係を保っていたのに、以降彼らは一部の国としか交流を持たなくなっていました。私はあまり詳しくはないのですが、亜人たちの国の奥地にある聖域に踏み入った者がいたそうです。そ

れだけならばまだしも、その際に虐殺が行われ、多くの子供が捕らえられて奴隷として市場に出されました。各政府がその行為を取り締まらず、事実上許可したことに對して、巫人たちが強い反感を抱いたのでしょう」

十数年前といえ、セラフィナがダグラス家にやってきた時期と一致する。エヴァンはかつてセラフィナが生い立ちを話してくれた夜を思い出していた。

「なぜ、彼らの侵入を止められなかったのでしょうか？ それに明らかに反感を持たれるような行為を黙認したというの、不自然な気がします」

そうエヴァンが問うも、男性は首を横に振った。

「そこまでは、私も存じ上げませんね。こちらにはあまり情報が入ってきませんし、直接的な関係は全くない土地ですから。詳しく知りたければ、巫人の国と国境を有するネーフエ共和国に行くのがいいでしょう」

ここからいくつかの国を経由しながら南西に進んでいけば、辿り着けるそうだ。

それから少しばかり話をして、エヴァンはひとまずセラフィナと相談してから決めることにした。時間はまだまだある。急ぎの旅ではない。

土地を見て回ればセラフィナも何か思い出すことがあるかもしれない。

そんなことを思いながら、エヴァンは大使館を後にした。

外に出ると、既に昼下がりになっていた。街はますます活気を見せており、行き交う人々は楽しげである。

これからどうしようかとエヴァンがセラフィナの方を見ると、話があるようだったので、手近な店に入って昼食を取ることにする。

店内は適当な椅子とテーブルが大雑把に配置されていて、店主の性格をよく反映しているようだった。そしてメニューも同様、お洒落とは程遠く、質より量といった具合である。適当に注文を済ませると、エヴァンはセラフィナと対面になって座る。

「それにしても、こちらは大らかな人が多いね。悪く言えば大雑把というか。からりとした氣候に合っているのだろうか」

「エヴァン様が特別、心配症なのですよ」

セラフィナはそう茶化す。エヴァンは普段いい加減なものの、気掛かりなことがあれば、あれやこれやと思い悩まずにはいられない質だ。

暫し他愛もない話が續くと、セラフィナが改まって話を始めた。

「以前に一度お話をしたかと思いますが……私がエヴァン様のところに来る前、何者かに襲われる出来事がありました。その前のことは——隠していたわけではないのですが、よく覚えていないこともあって、言えないままでしたね」

幼いセラフィナは月明かりの眩しい晩になると襲われたことを思い出し、震えて寝られ

なかった。

エヴァンは俯^{うつむ}きがちなセラフィナの手を取り、他の誰にも見せることのない笑^えみを浮かべる。

「大丈夫、心配しないでいい。俺だって、この旅の原因となった記憶に、俺は誰なのだろうか、本当にエヴァン・ダグラスその人なのかと悩んだ。けれど、君は何も言わず受け入れてくれた。俺も同じだよ。君にどんな過去があるうと、俺にとつての君は変わりやしないから」

触れている手に力が込められるのを、エヴァンは感じた。それからセラフィナはかつてのことを口にする。

「よく覚えてはいないのですが、私が自分の姿に違和感^{いわけん}を覚えることがなかったことから、そこは亜人の国だったと思います。敗戦国となった日は、おそらく私がそう思い込んでいただけで、実際には虐殺が行われた日だったのでしょうか。それから亜人ではない人に預けられたのですが、それが奴隷として売られたということなのか、あるいはその人が金欲しさに売り払ったのか、結果としてダグラス領に来るようになりました。そこからはエヴァン様が知つてのとおりです」

もしかすると、亜人たちの聖域に近いところに住んでいたのではないかということらしい。推測^{すそく}の域を出ないが、そうした記憶を辿^{たど}っていけば彼女の故郷にも行き着くかもしれ

ない。

「リンドブルムは、君がフィオナという人の血族だと言ったね。彼女が時空魔法に特化していたことから、そうした性質を持つ一族を探していけばいいかもしれない」

「手がかりはほかにありませんし、それしかないでしょうね。ところでフィオナさんは、どのような方だったのですか。エヴァン様は御存^{ごぞん}じなのでしょう？」

実際に見たわけではないが、エヴァンは記憶の中でその姿を確認している。しかしよくよく思い返してみれば、二度目に見た、平穏^{へいおん}な村でのひとときを過^{すご}している狐耳の女性は、フィオナではなかったのかもしれない。少しばかり容貌^{ようぼう}が異^{こと}なっていたような気がする。ならば、血族とかその辺りだろうか。

「外見的には君に似ているところはあるかもしれないけれど、内面に関しては全く知りはいないよ」

セラフィナはとりあえず納得^{なごく}したようだった。もしくは、それ以上のことは聞けないと判断したのか。

「先ほど言われたように、ネーフェ共和国に行こうと思うんだけど、どうだろうか？」

エヴァンが告げると、セラフィナも異論はないようだった。彼女もまた、真実へと近づく道を選んだのだ。

遅れてやってきた大味^{おあじ}の料理をさつと平^{たい}らげると、いよいよ出発となる。

店を出て通りを南に向かって進んでいく。そのまま街を出ると、まだ見ぬ大地の果てへと到達する勢いで駆け出した。

数日の後、ネーフエ共和国の国境に辿り着いた。入国には非常に煩雑な手続きが必要で、エヴァンが書類に書く字は次第に汚くなっていく。その隣でセラフィナは必要事項を記入しながらも、やけに多い亜人たちの姿に気を取られていた。

これまでの道中に亜人たちの姿はほとんどなく、たまに会った者はみすばらしい格好で、多くが奴隷のようだった。対立が深まっているというのも本当なのだろう。

エヴァンはセラフィナよりも先に書き終わると、近くの出店で買い物始める。ネーフエ共和国の食物は乾燥した土地で取れるものが多い。こんな場所だからどれも割高ではあるが、エヴァンは金に困ってはいないので、二人分の軽食を購入して戻る。

セラフィナの姿を探すと、何やら獣人の母子と話しているところだった。セラフィナの皮袋を、犬耳と尻尾の生えた少女が持っていることから、ぐずっていた少女にセラフィナが水をあげたらしい。

ネーフエ共和国では降水量が少なく、水分は果実から摂取しているほど水が貴重だそうだから、喉が渴いでいたのかもしれない。

エヴァンがそちらに近づいていくと、少女は怯えたように身を強張らせた。

「あ、エヴァン様。戻っていらしたんですね」

「ちょっと見てきただけだけど、こちらの食べ物はいくぶん分らないね……食べる？」

エヴァンが食事を差し出すと、少女はおっかなびっくり手を伸ばした。嬉しそうに尻尾を揺らしながら頬張る姿から、どうやら暫く食事を口にしていなかったことが窺える。

「セラにも、あんな小さいころがあったよね」

「エヴァン様にだってありましたよ。懐かしいですね」

二人の関係は珍しいものなのか、少女の母がおずおずと礼を言ってくる。

それからセラフィナが、先ほど彼女たちと話したことを少しばかり紹介してくれる。何でも、獣人たちの住んでいる国に盟主が出現したとのことだった。そしてその盟主は非常に凶暴で、あちこちの村を襲って回っているらしい。

その国はここネーフエ共和国に隣接しており、亜人の国々の中から見れば辺境に位置しているそうだが、だから助けなど暫く来ないのだろう。まして相手は盟主。迂闊に手を出せば返り討ちに遭いかねない。

彼女たちは避難のために渋々ネーフエ共和国に来たものの、職が見つからず、盟主関連の事件が落ち着くまで他国で糊口をしのぐとしていたところだという。

獸の特徴が強い者はどれほど貧しくともネーフエ共和国より遠くに行こうとしなかったそうだが、彼女たちは帽子をかぶって衣服の中に尻尾を詰め込んでしまえば目立つこと

もない。

それから暫し話をしているうちに、やがて彼女たちも出国の時間になる。

「お姉ちゃん、お兄ちゃん、ありがとう！」

手を振って去っていく少女を見ながら、エヴァンはゆっくりと腰を上げた。

セラフィナは何か言いたげであったが、遠慮しているようだった。そんな様子に、エヴァンはすぐに察しがついて、ゆっくりと切り出す。

「盟主、ね。並の兵じゃ太刀打ちできないだろう」

「はい。そして多くの国は飛び火するのを恐れ、関与しないことを決め込んでいるようです」

「けれど俺と君ならば、そこらの盟主くらいどうということはない」

セラフィナは驚いたようで、エヴァンを見て固まっていた。さもありなん、エヴァンは巻き込まれることは多かったが、彼自身の運命やハンフリーとしての身分に関係しない争いに関して、自分から進んで戦いに行くことはなかった。

「なに、道中の障害物を蹴飛ばすだけだ。英雄エヴァン・ダグラスの名を西の大陸にも広めてやるのさ」

彼の物言いに、セラフィナはこれまた違和感を覚えたらしい。そもそも、エヴァンは名誉などというものに興味がなしい、英雄という呼称に関しては似合わないと思つてすらい

たのだから。

まして、自分の力を過信していたことは一度たりともない。未だ、借り物の力ではないかと疑心暗鬼なくらいである。そして正面から挑んでいくより、敵が気付いていないうちに不意打ちするのを好んでいるような、卑怯な手さえ厭われない性格だ。

エヴァンは困惑気味な彼女に、ずいとは詰めた。

「まあ、取つて付けた理由にすぎないよ。俺にとつては、君が笑顔でなければ、金銀財宝、名声、この世のあらゆるものの価値は失われてしまうのさ」

エヴァンの言い方に人情味と照れ隠しが見えて、セラフィナは改めてエヴァンと向き合った。

「やはりエヴァン様は、不平不満を零しつつも、何でも成し遂げてしまうのですね。頼りにしておりますよ、英雄エヴァン・ダグラス様！」

セラフィナの表情が少しばかり明るくなったのを見ながら、エヴァンは安堵しつつも早速頭を悩ませた。

動き回る盟主を追いつけるのは効率がいいとは言いがたい。ならば、上空から見つけるのが早かろう。しかし、森林などで隠れている場合はそれだけでは済みはしない。

どうしたものかと思ひながら、やがて国境を越えようと、ネーフエ共和国のからりとした空気が、二人を出迎えた。

通りを行くのは、亜人と人が半々といったところである。獣人は頭が全部獣の者もいたり、下半身が毛で覆われていたり、様々だ。靴などを履いていないことから、獣としての強靱さを備えていることが窺える。

そうした様子を見てみると、セラフィナや国境で会った母子などは、あまり獣らしいところがないといえる。それゆえに、他国まで行く決意を固めたに違いない。

この国では獣人なども政治に参加していることから、亜人と人の関わりについて完全な中立を保っているらしい。それゆえに、彼らも平気で街中を闊歩できるのだろう。しかし、街の様子はどうにも穏やかではない。

増えすぎた獣人難民に対して、雇用問題や権利要求の高まり、そして治安悪化などを懸念した国民たちが不安を抱えているようだ。

難民とて、皆が皆善人というわけではない。仕事にあぶれた難民が犯罪行為を働くことは珍しくもなく、既に一部の宿では獣人お断りの張り紙が出されている。更にもともと住んでいる獣人と、新しく来た獣人との間でも軋轢が生じているようだ。

「誰かが悪いわけではないのだろうけれど……この状況はよくないな。とりあえず、盟主のことを知っている人を探そう」

「はい。表通りには衛兵が多いようですから、裏路地にも行った方がよいかもしれません」。治安のよくない地域に難民が多い可能性は高い。衛兵がいれば、路上生活者などはすぐに退去させられるだろうから、セラフィナの言うとおりにすることにした。

エヴァンは手土産に酒や食料を買ってから、裏路地に入っていく。暫くは普通の街と変わらなかったのだが、奥に進むにつれて路上生活者の姿が目に入ってくる。エヴァンは彼らに声を掛けるも、直接盟主に遭遇した者は一人もいなかった。被害を受けた村は壊滅しているそうだから、仕方がないかもしれない。

そうして裏路地をふらふらしていると、あまりがらのよろしくない数人の獣人がぞろぞろとやってきて、エヴァンとセラフィナはいっしょに囲まれていた。ほとんどが獣の特徴を強く持っている者たちで、中には全身毛むくじゃら、二足歩行の羊らしきものもある。彼らはおそらく、その外見から仕事にあぶれたのだろう。

「……何かご用ですか？」

セラフィナが呑気に首を傾げる。エヴァンより彼女の方がよほど胆が据わっていた。

「おう、裕福そうだから、俺たちにもちょっくら分けてくれないかと思ってな」

狼の獣人がセラフィナの方に近づいてくる。それはただの威圧行為のつもりだったのかもしれない。

だが、エヴァンの受け取り方は異なっていた。二人の間に一瞬で割り込み、頭二つ分は

大きい獣人を下から睨み付ける。

「彼女に触れるな」

獣人たちが狼狽^{うろた}え後ずさりするのを見て、エヴァンは少しばかり冷静さを取り戻して続ける。

「金ならいくらかやる。盟主を見た者はいないか。あるいは知り合いでもいい」

エヴァンがぐるりと見渡すと、一瞬びくついて、おずおずと虎の獣人が申し出てくる。どうやら見かけに反して、ずいぶんと気が小さいらしい。

「壊滅した村の知り合いがいるところなら知っている」

エヴァンは早速そちらに案内してもらおう。彼らが妙な気を起こせば、すぐにでも切り伏せる用意はできていた。

着いたところは、物置^{もの置き}のような建物だった。狭い中、十数人の獣人たちが身を寄せ合うようにして、暮らしているらしい。エヴァンたちが戸を叩くと、怯えたように一人の男性が出てきた。

「何か、ご用でしょうか……」

覇気^{はき}のない問い掛けに、エヴァンは暫し言葉を選ぶかどうか悩んだ。しかし聞きたい内容が内容なのだ。隠しても仕方あるまい、と直接的な言葉を口にした。

「これから盟主を倒しに行く。場所や特徴、何でもいい。情報があれば教えてほしい」

住人は盟主という言葉に身を震わせた。思い出したくないことなのだろう。だからエヴァンは、金は払うと付け足した。それは彼らにとつて現実的に必要なものであり、尽きてしまえば、また危険な地に戻るか野垂れ死^{のたじ}にするしかないのだ。

先ほどの男たちにいくらか払って追いつくと、家の中で詳しい話を聞き始める。

まず、盟主としては珍しく、鳥形の魔物であるらしい。子供^{おほ}と思しき同様の魔物が数羽、同行しているとのことだ。形はワシに似ていて、人を襲って食らうそうだ。臍物^{ぞうもつ}を食い散らかしていくことが多いが、生きたまま持つていかれる者もいたという。つまり、十分な大きさと重さがあるということだろう。

「その魔物は、羽ばたきを見せていたか？」

エヴァンの問いに、これといった反応はない。おそらく、そうした素振り^{そぶり}は見せていなかったということだ。さっと現れて幾人^{いくにん}もの被害者を出しつつ、去っていくことが多かったらしい。

ならば羽ばたきにより揚力^{ようりく}を得ているのではなく、滑空^{かつくう}する鳥に近いと考えられる。

当然重量があれば支えるだけの揚力を生み出すことは難しくなる。力場魔法の補助によりその力を補^{おぎな}っているに違いない。聞いた限りでは、体高^{たいこう}が人の三倍はあるようだったのだ、長時間の滑空には向かないはずだ。長くとも数時間といったところだろう。

それから、侵食領域^{しんしょくりょう}は広くないとのことだった。それゆえにどの辺りにいるのかがほと

んど分（ぶん）からず、急（いそ）な進（しん）攻（こう）を許（ゆる）してしまい、対（たい）処（しょ）できていないらしい。

盟（めい）主（しゅ）についておおよその目（め）途（と）を立てると、それ以上役（やく）に立（た）ちそうなことも聞（き）けなかつたので、早（はや）々に切（き）り上（あ）げることにした。

セラフィナと共に家（いへ）を出（で）ると、エヴァンは今（こん）後（ご）の展（てん）望（ぼう）を語（かた）り始（はじ）める。

「まず、こちらで魔（ま）石（せき）を買（か）っていいこう。代（だい）金（ぎん）は後（ご）で、統（とう）治（ち）してゐる者（もの）に経（けい）費（ひ）として押（お）し付（け）てやればいいさ。あるいは、どこか別（べつ）のところに盟（めい）主（しゅ）の死（し）骸（がい）でも持（も）っていけば、利用（りよう）価値（かち）を見（み）出（だ）した者（もの）が買（か）い取（と）ってくれるだろう……と、こんなところで考（かん）えてゐるんだけれど」

「お金の話は結構（けいこう）ですよ。それより、何か策（さく）はあるのですか？」

「あまり賢（か）い策（さく）じゃないけれどね。逃（に）げられるのも嫌（きら）いだから、確（た）実に仕（し）留（どめ）めようと思（おも）つて、それとも翼（よく）を付（つ）けて追（お）いかけてみる？ こ（こ）なら獣（け）人も多（おほ）いから目（め）立（た）たないだろう」

エヴァンの冗（じやう）談（だん）に、セラフィナは呆（あき）れたようにひと息（いき）吐（は）く。しかし、安（やす）堵（と）したのも束（た）の間（ま）だつた。

魔（ま）石（せき）を販（はん）売（り）してゐる店（みせ）に行（い）くと、エヴァンは手（て）ごろなものを根（ね）こそぎ購（こ）入（にゅう）してしまつたのである。

「エヴァン様（さま）、これほどまでに使（つか）うと……」

「だから金（かね）の問題（もんだい）なんだ。食（しょく）費（ひ）と旅（りょ）費（ひ）は残（のこ）しておくから大丈夫（だいじゆう）だよ」

伴（はな）侶（りよ）の浪（ろう）費（ひ）癖（へき）を咎（とが）めるべきか否（いな）か、セラフィナは悩（なや）みに違（ちが）いない。けれど結（けつ）局（ぎよく）何（なん）も言（い）わず、エヴァンと二人（ふたり）で、魔（ま）石（せき）が詰（く）まつて自（じ）身（しん）の倍（ばい）以上の体（たい）積（せき）にまで膨（ふ）らんだ布（ぬ）袋（ふくろ）を背（せ）負（お）いながら、店（みせ）を後（ご）にするのだつた。

それから衣服（いふく）と外（が）套（たう）、仮（か）面（めん）などを購（こ）入（にゅう）して、ようやく準備（じゆんぶ）が整（ととの）う。

街（まち）を発（は）つて西（にし）に進（しん）むにつれて、兵（へい）が多（おほ）くなつてくる。国（くに）境（けい）付（つ）近（きん）にもなると、戦（せん）争（そう）を控（ひか）えているのかと思（おも）われるほどにぴりぴりと緊（きん）張（ちやう）した空（くう）氣（き）が漂（よど）つてきた。

2

亜（あ）人（にん）たちの国（くに）に入（い）るのは、容（よう）易（い）なことではなかつた。というのも、国内（こく内）の状（じやう）況（きやう）が最（さい）悪（あく）であつたということ、そしてエヴァンが一般（いぱん）的な人（ひと）——亜（あ）人（にん）の領（りやう）域（いき）において人（ひと）と言（い）えれば亜（あ）人（にん）を指（さ）すため、新（しん）人（じん）と呼ば（よ）ばれる——の姿（すがた）をしてゐたということが理（り）由（ゆう）だ。

わざわざ新（しん）人（じん）が亜（あ）人（にん）の領（りやう）域（いき）に行くことは滅（め）多（た）にない。そして今（こん）は盟（めい）主（しゅ）がゐるというのだから、な（な）おさらである。それでも行（い）くとなれば、火（か）事（じ）場（ば）泥（どろ）棒（ぼう）くらいのも（もの）だろう。

結（けつ）局（ぎよく）、そのま（ま）まではまともに取（と）り扱（あ）つてもらへることはなさそうだつたので、エヴァンは洪（ほう）々（そう）右（みぎ）手（て）の布（ふ）を取（と）り払（は）うことにしたのである。

いくら重人といえども、そのような悪魔の腕を持つ者はおらず疑念を抱かれるも、彼らにとって重人を排斥する利はなく、ようやくのことで国境を抜けたのだった。

気候的にはそれまでと変わらず、乾燥した地域が広がっている。草原ばかりで目立つものはときおり生えている低木くらいで、大型の魔物が狩りをするには都合がいいだろう。

西の方に街があるということで、まずはそちらに向かっていく。道中は盟主の被害があるとは思えないほど平和なもので、拍子抜けしてしまうのも無理はない。

ようやく見えてきた街は、村と言っても差し支えないほどに小さなものであったが、おそらく疎開してきたのだらう、多くの人々が生活しているようだった。これ以上遠くとなると、どうしても国外に出ることになってしまう。

そんな中、エヴァンは敵意のようなものを感じていた。

(……なるほどね。セラはいつも、このような視線を感じていたのだらうか)

セラフィナもそれに気がついて、布で覆われたエヴァンの右手に視線を落とす。けれどエヴァンはこのままで何ともないのだと左手を振った。セラフィナが受けてきた感情を自分だけ逃れようとするのはずい気がしたのである。

それから街中をうろついてみるも、家に対して人の数が多すぎるため、小さな小屋に数人がおしこめられている光景も珍しくなかった。小さい子供のいる家庭はますます大変だらう。

もともと仕事もさほどなかったのだらう、浮浪者同然の者も見られる。

エヴァンは誰かに盟主の話を聞こうかと思つたものの、憔悴きつた者に聞くよりも情報が集まるところに行つた方がいいと判断して、街の長のところへと向かうことにした。

小さな街であるため、人づてに行けばすぐに辿り着くことができる。出迎えてくれたのは、犬の獣人であった。歳のせいなのかあるいは種族的なものなのか、顔が皺に覆われており、犬と人を合わせたような容姿である。

「故国へと向かう中、貴国における現状を聞きて馳せ参じました。傭兵としての生活は長く、盟主を仕留めたことも幾度かございます。微力ながらお力になれば、幸いです。お願いします」

エヴァンは改まった態度を取る。東の大陸と違って、こちらではエヴァンの名は知られていないはずだ。それゆえにたった二人の援軍が来たところで、長はさしたる希望を見出せなかったのかもしれない。声には気力がなかった。

「こちらでは盟主への備えはおろか、位置さえも掴めておりません。ただ襲われぬよう、ひっそりと隠れるばかりなのです……首都に行けば、おそらく全ての情報が手に入りましょう。もし、本気で戦う覚悟があれば、そうしてください」

長は曲がつた腰を撫でながら、あと十年若ければと闘志を燃やすのだが、すぐに冷めた現状に思い至り、ため息を吐く。

どうやら諦観ばかりがこの街には広がっているようだった。

それからエヴァンは急いだ方が良さそうだと、更に西にある首都へ向かった。

首都が近づくにつれ兵の数は増え、街も立派になっってくるが、盟主の被害が小さくなるということはない。盟主は空を飛んでいるため、市壁が何の役にも立っていないのである。急に襲われては対応もできない。

やがて首都に辿り着くと、エヴァンは初めに王城に向かって歩き出す。そちらは石造りの城で、東の大陸のものと比べると質相だが傷は見られず、未だ盟主の被害に遭ってはいないらしい。

「それで、どうなさるのですか？ 英雄が来たぞ、とおっしゃられたところで、大ぼら吹きと追いつ返されてしまいますよ」

「ありのままを話すだけさ。きつと王様というくらいだから、物分かりがよくて賢くてかつこよく、誰より偉いに違いない」

「そのような童の夢物語を語られるほど幼くはないでしょう？」

セラフィナはそうのように笑うのだった。

王城付近で人の来ない裏路地に入ると、三つの魔石を糧にそれぞれ石の人形を作り上げる。大きさはエヴァンと変わらないほどだ。

「素っ裸で行くわけにもいかないだろう、手伝っておくれ」

「……本当に大丈夫なのでしょう？」

「こちらではゴレムなどないだろうから大丈夫さ。なに、本当のことを言う必要はない、嘘さえつかなければよいのだ。さすれば解釈の問題ということになる」

セラフィナはもはやエヴァンの態度には慣れている。何も言わずに彼の手伝いをして、石人形に衣服と仮面、そして外套を被せた。

エヴァンが制御魔法を用いると、設定した歩行モーションに従ってそれらは動き始める。あまりに理想的な動きをするくらいがあるため、逆に不自然になるが仕方がない。

それから通りに出たものの、いかにも不審な彼らの姿は自然と目立ってしまう。しかし、王城はすぐ近くである。辿り着くと、迫り出した窓から監視している門番に誰何される。

今回はかりは、形式的な問答ではなく、奇妙な五人組を見て本心からの疑問だったかもしれない。

彼我の距離はそれなりにある。エヴァンは大きく息を吸い込み、声を張り上げた。

「ハンフリー大使、エヴァン・ダグラスが参った。御挨拶に伺いたい」

ここではハンフリーの名前自体が知られていないかもしれない。だが、書庫を調べれば出てくるはずだから、よほど蔑ろにされない限りは身元の確認くらいはしてもらえらるだろう。

エヴァンは身元の証明とばかりに、剣を掲げて見せた。そこには、ハンフリー王国の国

章が入っている。王太子から利用されるばかりでは面白くないというのも、あえてこうした理由の一因であった。

どうやら詳しい者が出てきたらしい。その男が国章を見るなり、エヴァンはすぐさまへ通されることになった。

それから応接間にて待っていると、外交担当の男がやってくる。丁寧な対応をしつつも、その目には疑いの色を浮かべていた。

「お待たせして申し訳ありません。事前にご連絡いただければ、お迎えに上がったのですが」

「どうぞお気遣いなく。このような状況では、兵の一人でも惜しいでしょう。私も貴国の事情を知ったのは、ある役目の途中のことだったので。聞きつけ、いてもたってもいられず、参上いたしました」

それらの台詞は強ち嘘ではない。エヴァンは差し出された茶をひと口する。それからゆっくりと、一言一言述べていく。

「つきましては、国内における兵の運用を許可していただきたく存じます。手勢は百ばかりと少なくともありますが、皆屈強な男たちでございます。中には盟主と一騎討ちをして、見事勝ち取った者もおります……お許しいただければ、必ずや此度も盟主を討ち取ってみせましょう」

そこでエヴァンは相手の目を見て、答えを待った。

普通ならば、馬鹿げていると嘲笑するか、勝手にしろと捨て置くところだろう。だが、彼の目の前にいる男は、呼吸するのさえ忘れているほど、その話に引き込まれていた。エヴァンのただならぬ態度を目の当たりにして、その場の空気に吞まれていたといってもいい。

「本当に、可能なのですか……?」

「ええ。ダグラスの名に懸けて、約束は果たしましょう」

男の生唾を呑む音が、やけに大きく聞こえる。

それから、男は興奮気味に部屋から出ていった。王に許可を頂いてくることである。かくしてその日のうちに、許可は出た。単に断る利がなかっただけなのだろう。

夜も遅くなっていたので、その晩は王城にて一夜を明かし、翌朝から行動を起こすことになった。

エヴァンはセラフィナと二人きりになり、ようやくひと息吐いた。

彼女は石人形のところまで近づいていくと、矯めつ眇めつ眺める。部屋の片隅に置かれているそれは兵を模したものであるが、外套や仮面の隙間から覗く肌は人のものではない。

「よく、ばれませんでしたね。ひやひやしました」

「普通は、大した交流もない国の王城に偽造した兵を引き連れて上がりやしないからね。」

そんなことばかり疑っている者は、後世に名を残すほどの名宰相か、物事の道理も弁えぬ愚者くらしいものだろう」

「やはり大英雄エヴァン様は普通ではないのですね」

これほどの大事を成した後だというのに、エヴァンはけろりとしていた。セラフィナはそんな彼の佩いている剣の国章に視線を向ける。

「それにしても、勝手に大使と名乗ってもよろしかったのですか？ 王太子殿下からこのような話は受けておりませんよ」

「彼は成功させれば何も言うまい。そういう方なのだから。加えて、俺は王太子殿下の友人というたいそうな身分であられるのだぞ。大使を辞めると言われたこともない」

エヴァンはおどけながらも、ふてぶてしく言っている。彼は権力に関して利用できるものは利用しようとする性格だった。

「それにしても、盟主さへ凌ぐ力の持ち主が、何の強制力も持たない家族という関係に縛られてるのは、奇妙な話ですね。エヴァン様らしいとも言えますが」

「結局のところ、俺も一人の人間にすぎないことさ。いつまで経ってもダグラスの名を捨てることはできないし、ましてや君のためならばなんだってするだろう。どれほど力を得ようと、どれほど強い心を身に付けようと、変わることはないんだよ」

だからこそ彼が忠誠を誓うのはハンフリー王国ではなく、ダグラスの名であるのだ。こ

の国の王への誓いをその名に立てたのも、決して不誠実さの表れではなく、真摯であろうとしたからこそだ。

旅に出るときに母から貰った剣は、何のしがらみも持たないはずの彼を縛るかのようで、かといって手放してしまえば、家との繋りさえ断たれてしまう気がした。

やがてエヴァンは剣帯を外して、それらをベッド脇に立て掛ける。

「さて、明日は早いから、もう寝ようか」

エヴァンがベッドに誘うと、セラフィナはすぐさま布団の中に潜り込んでくる。

今は家紋も国章も手の届くところにはない。ただ身を寄せてくる彼女の温もりだけが
ある。

この関係がいつまでも続いていけばいい、とエヴァンは微睡む彼女を抱き寄せた。

早朝、まだ暗いうちからエヴァンは作業にいそしんでいた。

寝ぼけ眼をこすりながら雑事に励んでいた女中に挨拶をして、城を出てきたのが先ほどのことである。入ってきたばかりの盟主の出現情報を元に、おおよその現在位置を推測。そしてその方角に向かったのだが、広がっているのは草原ばかり。

エヴァンは大量の魔石を土の上に転がすと、制御魔法を発動して、それぞれに番号を一から順に割り振っていく。ぎりぎり四ケタには足りない程度の番号を付け終えると、エヴ

アンは自分をゼロ番として魔法を発動させた。

この国の首都は、国の中心に位置している。それゆえに、外側に向かって広がっていく扇形を取れば効率よく探すことができる。

制御魔法により与えられた番号に従い、エヴァンを中心に扇形のフォーメーションを取った魔石は、それぞれ生成魔法により石の羽を形成。それから力場魔法により移動し始めると、鳥のように滑空していく。盟主の情報からヒントを得たのだ。

互いにぶつからないよう距離を調節しながら、遠くへ遠くへと広がり始める。一つ一つがアンテナとして働き、上位の番号から並ぶようにエヴァンの指令を伝えるだけでなく、下位の番号から遠方の情報をエヴァンに伝える作用もある。

これらには、制御魔法によりポテンシャル法——勾配に従って移動させる方法であり、球が坂道を転がるように低地に移動させられるようなもの——を用いることで、仮想的に高地とした障害物を避けて移動できるよう設定してある。だから一度発動した後はエヴァンが手を加えずとも自動で移動していた。

後は、盟主が見つかるのを待つだけだった。

とはいえ、それも盟主が大幅に移動していないという前提があつてのものだ。既に国内にいなかったり、別の土地に移動していたりする場合は、無駄骨になってしまう。

エヴァンは地に腰を下ろすと、剣の調子を確かめるなり、横になった。空は青々として、

敵を発見するには都合がよさそうだ。

セラフィナもその隣に腰を下ろして、二人で空を見上げる。

「俺はずっと、別の世界を知るためには、あの空の向こうまで行かなければならないとばかり思っていたんだ。だけど異世界は俺の手の届くところにあった。と言っても触れることすら叶わないけどね。今もこうしてその世界の力を使っているというのは、どうにも妙な気がするよ」

エヴァンはリンドブルムの言葉を反芻する。魔法とは、自身の中にある異世界の粒子を触媒として、異世界のエネルギーをこちらにもたらす行為である。

そんなエヴァンにセラフィナは、

「私には空の向こうも、魔法のある異世界も、そしてエヴァン様も謎ばかりです」
などと笑うのだった。

それから太陽が現れ始め、エヴァンが木陰に移動しようとしたときのことだった。探索させていた魔石から盟主の映像が送られてきたのである。

盟主の大きさと形は聞いていた通りで、大型のワシといったところだ。しかしその重すぎる体重のためか、木々の上にはとまらず地の上で獣人の肉を貪っていた。小型のよく似た魔物もそこで別の肉を突っついていてる。

それらは一部分だけを食らうと、残りは興味をなくしたように放り捨てた。余すことな

く骨までむしゃぶりついていれば、ここまで被害が大きくなることはなかったはずだ。

エヴァンは盟主を中心に取り囲むよう、魔石の配置を変える。草原に近い場所なので、数で押し切ることもできるだろう。

「セラ、いよいよ盟主が見つかった。これより討伐を行おうと思う」

セラフィナが頷くのを見て、エヴァンは魔法を発動させる指示を魔石に飛ばした。

それを皮切りに、盟主の付近にあった魔石が一斉に動き出す。生成魔法により生み出した鉄の槍に力場魔法を用いて、盟主とその近辺にいる魔物に向けて放つ。

油断していたのか、小型の一体が串刺しになった。しかしほとんどの魔物は空高く舞い上がって避けていた。その際、予想通り力場魔法が用いられている。

上空を旋回するように動く盟主に向けて、次々と攻撃が仕掛けられる。魔物の群れは鉄の槍を回避していたが、いつまで経っても人の姿を確認できなかったため逃亡を始める。

敵が街に向かわないよう、攻撃の方向を変えて、こちらの方へ上手く誘導する。やがて魔物の一体がしびれを切らしたのか、魔石に向かって急降下。

飛んできた魔物は鋭い爪で魔石を蹴飛ばし、ひびを入れたが、そのときには別の魔石から槍が飛んできている。後は、貫かれて地に落ちるだけだった。

次々と魔物が地に落ちていく中、盟主だけは未だ無傷である。
エヴァンはまだ時間がかかりそうだと判断して、柄から手を離れた。

盟主が空に飛び立ってから、相当な時間が経っていた。昇り始めたばかりだったはずの日は、既に天辺に移動しつつある。
気温はすいぶんと上がり、このような状況で日に晒され続けていればさぞ体力を消耗することだろう。

エヴァンはセラフィナと木陰で水を飲んでいたが、盟主ができるだけ力場魔法を使わないようにしていることから、仕留める頃合いだと判断して移動し始める。

盟主が到着するより先に、都合のいい広さと遮蔽物のある場所に移動して、岩陰に潜む。視界は侵食領域内の光から制御魔法により確保しているため、あえて身を晒す必要はない。息を潜めて待っていると、魔石に追い立てられながら、低空飛行で盟主が飛んでくるのが見えた。

これまでに使った魔石の大半は盟主に破壊されるか、あるいはそのエネルギーを使い果たしてしまったため、ここで逃せば骨折り損ということになる。

盟主は耐えかねて、いよいよ降り立って地を駆ける。その最中、一つ二つと魔石が蹴り飛ばされていく。

その向かう先は、エヴァンたちが潜んでいる岩。二人の存在にはまだ気付いてはいないはずだ。

エヴァンはセラフィナを手で制しながら、敵との距離を合図しておく。彼女は手槍を手にしたまま、微動だにせず控えていた。

そして最後の魔石が力を失うと同時に盟主が岩へと差し掛かる。エヴァンは片手を挙げた。

それを見るなりセラフィナは大きく振り被って、投擲のモーションに入る。一步踏み込むと、勢いよく槍を放った。

同時、盟主が視界に現れる。エヴァンの予想していたのと同じ瞬間であった。

が、胴体を羽ごと貫くかと思われた槍は、僅かに逸れて背の方を貫いていた。盟主が疲労のあまり、よろめいてしまったのである。

それゆえにエヴァンが飛び出し剣を振るうも、盟主は力場魔法を用いて体をのけぞらせ、予定では使い物にならなくなっていたはずだった羽をばたつかせた。

翼の中段まで刃を走らせつつも、その直撃を食らってエヴァンは大きくのけぞる。そこへ立て続けに強烈な蹴りが繰り返された。

エヴァンは右腕で受け止めるも、追撃が間に合わなくなる。盟主はその隙に、辛うじて絞り出した力場魔法で飛び上がった。

エヴァンは追わんとするも、すぐに足を止めた。セラフィナの地を駆ける音が、すぐ近くまで来ていたからである。

彼女は槍の柄を地面に突き刺すと、大きく跳躍する。距離は瞬間に縮まっていく。それは単純な速さではなかった。セラフィナが纏う侵食領域内においては、時空魔法の効果が反映されているのだ。素早く流れる時間を駆ける彼女は、もはや止められやしない。

盟主の頭上まで一気に躍り出ると、今度は力場魔法を直下に向けて使用。槍を突き出し、盟主へと向かっていく。

盟主の胴体を貫くと、セラフィナはそのまま槍を押し付けながら、地に向かう。そして盟主が地に打ち付けられた。そのときには、流し込まれた毒で抵抗すらできなくなっていたのだらう、受け身さえ取っていなかった。

地に横たわったまま痙攣する盟主は起き上がることもできない。

「セラ、お見事。これで被害を受ける者もいなくなるだろう」

セラフィナは槍を抜くと、念のため盟主の頭部を貫く。それから今度こそ完全に動かなくなった死骸を眺めていた。

常と違って魔石になる様子がない魔物の死骸を、エヴァンが担当。

「帰りましょう、エヴァン様。報酬をたんまりといただくのでしょうか？」

「ああ、ただ働きは性に合わないからね……あれ、セラ、お金は結構だったんじゃないのかい？」

「エヴァン様と一緒にいると、誰しものがめつくなってしまうのです」

セラフィナはくすくすと笑う。その笑顔が眩しくて、エヴァンはつい誤魔化すように盟主の死骸を高く掲げて見せた。

それから帰途では、先ほどまで戦っていたとは思えぬほど呑気な会話をしていた。

「この機会に貯蓄しておかなければ、ダグラス領では貯金などできませんね」

「氣を付けるよ。なんせこの旅が終わったら、君と式を挙げなければならぬからね」

エヴァンの口を突いて出た言葉に、セラフィナはほんのり頬を赤らめ、はにかんだ。

首都に戻ると、盟主の姿を見た兵に射掛けられたりしつつも、暫く時間をかけると城内へと案内されることになった。昨日、エヴァンと話をしていた男が興奮しながらやってきて、王に謁見するよう告げてくる。

さすがに泥のついた衣服で行くわけにはいかないので、エヴァンは着替えを始める。衣服は用意してもらえとのこととで、サイズが合うものをわざわざ選んでくれるらしい。

それゆえにエヴァンは女中にあちこちの寸法を測られていた。

彼女も長くその仕事をやっているプロフェッショナルなのだろう。さっと仕事を終わらせて、立派なジュストコールを持つてくる。

それからエヴァンの衣服を脱がせていき、右手の布を取り払う。

「あの、これは目立つでしょうから……謁見するにあたって、まずいではありません

か？」

「そのようなことはありません。この国では、人を見た目で判断することはありませんから。たとえ立派な耳がなくとも、尾がなくとも」

ここでいう人とは、すなわち亜人のことであるから、むしろ出しっぱなしの方が都合がいいということだろう。エヴァンが黒ずんだ右腕に視線を落としてつつ上衣を脱ぐと、赤い皮膚が現れる。

「まあ、竜人でございましたか。何と立派なのでしょう」

どうやら、竜と人が混じってできた人種もいるらしい。憧憬らしき感情を抱かれるのは、おそらく強力な力を持っているからだだろう。これまで遭遇した竜は並外れた力を持っていた。

エヴァンの準備が整って待機していると、薄桃色のドレスに身を包んだセラフィナが入ってきた。フリルが何段にも重なっており、派手な色合いではないものの、可愛らしいデザインである。みかん色の髪は結い上げられて、綺麗な金細工の髪飾りで留められている。

そして何より、どれほど立派なドレスだろうと引き立て役にすぎないと思わせる、セラフィナの美貌が目を引き。少しばかりふくらした頬に少女の愛らしさを残しつつも、鮮やかな唇や顔の輪郭は理想的な曲線を描いており大人の魅力がある。

大きな橙色の瞳が、戸惑いがちに向けられていた。

「セラ、綺麗だね。お姫様みたいだ」

「ふふ、ではエヴァン様が出世される日を楽しみにしていきましょう」

「その場合、父上が出世しないと。俺が頑張りすぎると、君は姫ではなく妃になるのだから」

「そのような細かいことは、どうでもよいのです。エヴァン様となら」

莞爾と微笑むセラフィナに、エヴァンは心を奪われる。その姿を一目見た者は誰もが、傾国の美姫だと息を呑むだろう。

その彼女が隣にいることに、エヴァンは珍しく舞い上がっていた。それは彼にとって、どのような褒美にも勝るものだったに違いない。

それから謁見の間に通されると、玉座に狼の獣人が座っているのが見えた。服を着た二足歩行の狼が腰掛けていると言った方が近いかもしれない。

「面を上げよ。盟主を討ち取りし活躍、見事であった」

エヴァンたちが形式的な所作を行うと、王から質問が投げ掛けられる。

「百の兵がいると聞いていたが、どうにも姿が見えないようだ。どういうことか？」

「彼らには調査だけ行ってもらいました。盟主と相見えたのは、私と彼女の二人でございます」

呼ばれたのは盟主を打ち倒した功績なのだから、謁見するのも二人だけという理屈である。もちろん実際のところは、そのような兵は存在していないのだから、連れてくることのできないだけだ。

王は感心したように「頻り領くと、今度は報酬について口にする。エヴァンは兵に与える報酬を願った。よき主人のようだが、実際のところはもちろん、エヴァンの総取りである。」

そしてセラフィナは、旅の目的を語り始める。

「私の故国を探し出すために参りました。十数年前のあの事件で、被害があつた近辺だと見当を付けているのですが、はっきりとした情報が手に入らないのです。そこで、当時の事情に詳しい方を紹介していただきたく存じます」

「ふむ。もしそうならば、そなたの姿を見るに……聖域の姫御子様ではなからうか？」

「姫御子様、でございますか？」

王は肅々と頷いた。

聖域というのは巫人たちの祖となった神を祀っている場所らしい。巫人たち全てにとつての聖域であるらしく、古くから複数の国が共同で防衛しているようだ。

そして、その神の子孫として崇められている者が、セラフィナとよく似ているとのことだった。

それならば、この国に来たときから誰もがそう思うのではないかという疑問が浮かぶ。しかしどうやら、式典の前に王族が参拝するくらいであり、一般の者は聖域に近づくことはほとんどなく、顔も知らないそうだ。そう告げた王は、言葉を続ける。

「では私から、この国の危機を救った者として参拝できるよう伝えておこう」

「ありがたき幸せに存じます」

セラフィナは深々と頭を下げた。

謁見を終えて客間に移ると、二人は存分に寛ぐ。

「それにしても、この格好ならばこのまま式を挙げてもいいくらいだ」

「では、そうしますか？ 私はそれでも構いませんよ」

「いや、式のときは別のものにしよう。着飾った君を二度見られるのなら、二度幸せだからね」

「エヴァン様は、口が上手いんですね」

セラフィナはそう言いつつも満更ではない様子だ。

二人で穏やかな日々を過ごすのも、そう遠い未来ではないだろう。エヴァンは二人の未来を思い描いた。

それからエヴァンはふと記憶にあった人物を思い出す。それは狐耳の女性——おそらく、リンドブルムから伝え聞いたフィオナの子孫と思しき女性だ。

（彼女が姫御子である可能性は高い……それにしても、上手くいくこともあるものだ）

盟主の討伐という実績がなければ、おそらくは聖域に行つたところで追いつ返されていただろう。人助けも悪いことばかりではなかった。

それからエヴァンとセラフィナは、聖域へ向かう準備が整うまでの数日間、この国に滞在することになった。盟主討伐の噂はあつという間に広がって、次々と尾ひれがついていく。ハンフリーの大貴族がやつてきたとか、聖域から亜人の神によって遣わされたとか、根も葉もないと言いつつ切れないが、合っているようで間違っているものばかりである。

エヴァンは滞在中、それらの状況を考えながらも、やけに盟主の出現が活発であるように思われてならなかった。エヴァンが盟主を討ち取ったのはこれが三回目なのだ。数十年に一度しか生まれないほど珍しいものであつたはずなのだが、今ではすっかり慣れてしまっている。

「エヴァン様、手続きが済みましたので、早速馬車を出していただけることになりました……何か考え事ですか？」

「いや。出発でしょうか」

城を出ると、すぐに馬車に乗り込む。それからゆっくりと、大通りを南下する。走つていった方がよほど早いのだが、今回は付き添いもいることもあつて、時間をかけることにした。

街を出ると、南西部に向かって進んでいく。途中に砂漠があるため、そちらを迂回（うかい）していくことになるそうだ。それより南の熱帯に聖域があって、巫人の国々の中心になっているらしい。精神的な意味でも、地理的な意味でもそうなのだろう。窓の外で変わっていく景色をエヴァンは眺めた。

3

目的地が近づくにつれ、木々が生い茂（しげ）ってくる。高さは大人の数十倍にも及ぶほどで、のけぞって見上げなければ天辺は見えない。

地表付近には光が届かないため内部は暗く、下草（したくさ）は僅（わず）かな光を奪い合って生活している。降水量が多いというところでじめじめしており、いつまでもこんなところにいれば、カビが生えてしまいそうだった。

エヴァンは馬車が揺れ始めるのを、座席から伝わってくる衝撃（しやうげき）で感じていた。

地表付近ではさほど目立った植物があるわけではないので、巨大な植物の板根（ばんこん）を避けていけばよいのだが、舗装（ほそう）されていない道なのでひどく揺れるのだ。

「これでは、聖域に辿り着く前に俺の尻（しり）は痣（し）だらけになってしまうよ」

などと愚痴（ぐち）を零していると、それまでの鬱蒼（うつそう）と茂った森の中とは異なっており、開けた空間に出た。

森を円形にくり抜いたような広場には、いくつかの木造の家々がある。隣家（りんか）との距離は近かったり遠かったりしており、これといった規則性もない。

巫人たちが聖域と呼ぶ領域はこの辺一帯を指しているが、正式に聖域として定められているのはごく僅（わず）かな範囲だけだそうだ。ここには聖域を管理する一族が住んでいるという。エヴァンもその者が住む場所には見当が付いた。聖域に一番近い家は集会所といった体（てい）で、壁には塗料（とりょう）で奇妙な模様（もよう）が描かれて、非常に目立っていたのだ。

行き交う人の姿はほとんどない。この地に定住しているのは、神を祀（まつ）る一族と、その身の回りに関して手伝いをする者くらいだからだろう。祭事があるときには各国や付近の村から人が集まるそうだが、今回はそういう時期ではない。

やがてエヴァンたちの姿に気付いた男が寄ってくると、驚いたようにセラフィナを見るのだった。目は泳ぎ、明らかに狼狽（ろうたい）しているのが見て取れる。

彼はそんな状況であったが、「フィオナ様のご案内いたします」と震える声で述べた。

エヴァンは思わず、セラフィナと顔を見合わせる。数千年前、カールに作られたフェリシアやリンドブルムが存命であることを考えれば、フィオナが生きている可能性を捨てき

ることはできない。だが、リンドブルムの口ぶりからすれば、既にフィオナは亡くなっているとも見てもいいはずだ。

その疑問も直接会えば解決する。エヴァンはこれまで手伝ってくれた付き添いの獣人たちと別れ、それから男の後に従う。

一番大きな家に近づくにつれ、いつになくエヴァンの緊張は高まっていく。今回関連しているのが彼自身のことではなく、セラフィナのことであつたからだろう。

階段を一段上るたびに、軋む音が聞こえた。

そして扉を開けると、奥に一人の女性が正座しているのが見える。その容貌は艶やかな金の髪に狐耳、そして豊かな尻尾と、記憶の中で見た二人の女性に似ていたが、細部はどちらとも違っていた。

案内の男が一揖して退室すると、広々とした建物の中、エヴァンとセラフィナ、そしてフィオナと呼ばれた女性の三人だけが取り残された。

「よくぞ参られました……いえ、戻ってきてしまった、というべきでしょうか」

彼女の視線はセラフィナだけに向けられている。エヴァンは口をはさむべき場面ではないと、押し黙った。

セラフィナは迷っているようだったが、やがて口を開く。

「お初にお目にかかります。戻ってきてしまった、とはどういうことでございますか」

セラフィナを見つめるフィオナが物悲しげに見えるのは、なぜだろうか。

ゆっくりと、重苦しい沈黙が流れる。

「貴方と私は、以前にも会っているのですよ……何しろ、親子なのですから」

「……私の、母上なのですね」

フィオナは小さく頷いた。

セラフィナは感動しているというより、実感が湧かないといった様子だった。

「何から話しましょうか……貴女はまだ小さい頃でしたから、覚えていないとは思いますが。私たち一族は、フィオナの名を継いできました。連綿と続きました。ですから。この名を、そして血を絶やさぬよう運命づけられているのです。セラフィナ、貴女もここに戻ってきてしまったからには、もう逃れられないでしょう」

どうやらセラフィナという名は、彼女に対する個人名ではないようだ。フィオナの子という意味を持つ古代語「セラフィオナ」という呼称を、幼い彼女が「セラフィナ」と思い込んでしまったのだろう。それゆえ彼女には姓がなかったのだ。

そしてフィオナは掟を語り始める。数千年、百代以上にも亘って続いてきた、一族の掟を。

フィオナの血族は、同族内における婚姻に縛られるという。そのしきたりが始まって以来、ただ一度たりとも外部からの血を入れたことはないそうだ。

そしてフィオナの子ら——セラフィオナのうち、もつとも時空魔法に長けている者がフィオナの名を継ぐことになる。

だが、フィオナの名を継がなかったからといって、好き勝手にすることを許されているというわけではないらしい。この地に住まい、血族として生きていかねばならないという。たった一人で血を絶やさぬことなどできないのだから。

しかしそうになると、既にフィオナの名を譲った者はどうなったのか、逃げる者はいなかったのかという疑問が生じる。

エヴァンがその考えに至ったとき、フィオナは窓の外に視線を移しており、一つため息を吐く。その表情に浮かんではいるのは憂いだけだった。

「フィオナの名を失った者は、神の糧となるのです。言葉通り、その身を我らが神に捧げるといことです。断ることはできません、神はこの地を見通しておられますから。逃げることも、愛する者と暮らすことも、許されはしないのです」

ならば、セラフィナはどうなのだろうか。彼女はこの地を離れてダグラスの地までやってきたのだ。それはたつた一つの例外、鉄の掟を打ち破る反証になるだろう。

セラフィナもその考えに至ったのか、エヴァンが口にするよりも先に述べる。

「では、私はなぜそのような運命を辿ることがなかったのでしょうか？ 私はほんこの地にいたことはありません。ずっと、遥か遠く、東の大陸で過ごしておりました」

フィオナは痛ましげに眉根を寄せた。

「あのときは、新人が神を討ち取りに来たのです。彼らに何のたくらみがあったのかは分かりませんが、騒動に紛れることで貴女を逃すことができました。身勝手な望みだったでしょう。勝手に理不尽な運命に巻き込み、その癖に母親面をしていたのですから。それでも貴女が平凡な幸せを手にする日を願ってしまったのです……けれど戻ってきてしまったのですね」

フィオナはもはや、神に抗うのを諦めていたようだった。どうやら神というのは、抽象的なものではなく、具体的にそこに存在するものを指しているらしい。

エヴァンはいってもたつてもいられなくなつて、思わず立ち上がりかける。すんでのところでこらえると、代わりに言葉を吐き出した。

「そのような理不尽なことがあつてよいはずがありません。何のために神とやらの犠牲にならねばいけないのか、理解しかねます。私は彼女と約束しました。必ず故郷——私たちが暮らした、ダグラスの地に帰るのだと」

「エヴァン様……」

セラフィナは隣でいきり立つエヴァンに視線を向ける。心なしか、その手には力がこもっているようにも見えた。

けれど、フィオナは首を横に振った。

「襲ってきた新人たちは皆、手練れでしたが、ことごとく返り討ちに遭ったのです。大半が骸を晒すことになり、命からがら逃げた者も、五体満足ではありませんでした」

フィオナはそう言うってから立ち上がり、別室に向かう。暫くすると、掌に収まるほどの小さな像を持ってきた。

「見覚えはありませんか」

「これは……自然精霊教のものだ」

精霊を模したもので、教会などの上に設置されているのをよく目にしている。さすがに目立つ白い外套を纏っていることはなかったようだが、そこを死地と見て肌身離さず持っていたのだろう。

これで自然精霊教のたくらみの一端を垣間見ることができたといえよう。彼らは巫人の神に関する情報を掴んでおり、そこには何らかの価値があるということになる。

フィオナはその像を、新人の中で力を持つ者の証として見せたのだろう。だが、相手がどれほど強大だろうと、エヴァンはセラフィナが苦しむ未来を受け入れる気などはなかった。彼女を見捨てることなど、できるはずがなかった。

「私はその運命に唯々諾々と従うことはできません。神について教えてください。私は必ずや、彼女との未来を切り開いてみせます」

フィオナはそれを聞いて、改めてエヴァンとセラフィナの関係を認識しようだった。

「そうですね……このしきたりは、ただ一人のためにあるそうです。そういう意味では、神さえも時空魔法の力を高めるための道具にすぎないといえるのかもしれませんが。完成された時空魔法の使い手が必要とする者が、いずれ迎えに来ると言われています。貴方は、自分こそが数千年蓄積されてきた思いを手にする唯一の存在だと確信できますか？」

それはあるいは、数多の犠牲者の思いを踏み躪る覚悟があるかどうか、ということでもあるかもしれない。

おそらくそのしきたりの目的は、カール・リンドが時空魔法を使ったということに少ない関わりがあるのだろう。

だが、それは今このときにおいては関係がないことだった。

「私がそのような人物であるのかどうかは判断が付きません。ですが、彼女のために必要なことならば、そうやってみせましょう。彼女が望むなら、必ずや叶えてみせましょう」

エヴァンははっきりと言い切った。そこには迷いの浮かぶ余地などない。あるのは、彼がセラフィナと運命を共にすると決めたときから変わらない覚悟だけだ。

フィオナはエヴァンの姿を眺めた後、聖域に赴く許可を出した。それはただの気まぐれだったのかもしれない。けれど、一族の安全さえ危うくする決断を下したのは間違いないだろう。

「勝手にしなさい」と述べる彼女に、どこか母親染みだたものを覚えたエヴァンは、ふと、

ダグラス領が懐かしくなった。

それからまだ日が昇り始めたばかりということもあって、エヴァンは出発の準備を済ませると、すぐさま聖域に向かうことにする。

自然精霊教の者たちが討ち取られたということから、激戦^{げせん}が想定されるだろう。だが、易々^{やすやす}と負けてやる気などはなかった。ましてセラフィナを置いて一人で帰ることなどできるはずもない。

セラフィナは棺の具合を確かめ終えると、エヴァンに話し掛けてくる。少しばかり戸惑いを浮かべながら。

「あの……エヴァン様。これでよろしかったのですか？」

「君と帰るには、邪魔^{じやま}をする者を踏み躪^{ふみじ}っていくしかないだろう？　ならば、これでもいいだよ」

エヴァンは断言した。

セラフィナは彼の隣にきて、少しばかり視線を外す。

「エヴァン様、覚えていますか。仮初^{かりあ}の幸せであっても、たとえ夢の中であっても、エヴァン様のいない生活など考えられないと言ったことを。それは今も変わりません。もしこの関係が作られたものであっても、私はただ貴方がいればよいのです。それだけでよいです」

エヴァンは「もちろん覚えてるさ」と返した。忘れるはずがなかった。だからその夢を叶えなければならない。

いよいよ、二人は聖域に向けて歩き出す。

その先に待つのはきつと、この運命を手にするためのきつかけだろう。そして平凡な未来^{みらい}は、来^きるはず。

長きに亘^{わた}り求めてきた真実が、すぐそこにあつた。

聖域が近づいてくるにつれ、視界は開けてくる。続く獣道^{けものみち}も、ずいぶん歩きやすいものに変わってきていた。

「……セラ、気付いてる？」

「はい。時空魔法が使われておりますね。感覚的にはバルトロ王国のときとよく似ています。あのときは時間の進みが遅く、三年も置き去りにされてしまいました。これは逆でしょう。むしろこちらの方が時間の進み方が早くなっています」

何の目的でそうしているのかは分からないが、フィオナが言っていた通り、神が時空魔法の能力を高めるべく仕組まれた存在であるということは疑いようがない。

自然と緊張感が高まってくる。神と呼ばれているものとて、この世界において物理的に存在しているのなら、切ることも力で踏み躪^{ふみじ}することもできよう。

エヴァンは剣に手を掛けると、具合を確かめる。頼れるものは剣一つ、その身一つ。一体となつて、ただ刃を喰らせるのみ。

やがて魔法の影響が強くなつてくると、その発生源が明らかになつてくる。そこにあつたのは大きくも粗大な祠だつた。その中がもっとも魔法の効果が高くなっているようだ。おそらく、そこに神と呼ばれるものがあるのだろう。

木造とはいえ全体が覆われているため、中は見えない。

先ほどのフィオナの口ぶりからすれば、こちらの接近は気付かれている可能性が非常に高い。だが、出てくる気配がないのならやることは一つである。

セラフィナは背負っていた槍を構える。余分な力は何一つこもっていない。

エヴァンはセラフィナに目配せすると、懷から魔石の入った袋を取り出した。

宙に放り投げられたそれらは上空でピタリと静止し、魔法を発動する。岩石と共に炎を生み出し、祠目がけて撃ち出す。

木々が粉碎され、炎に吞まれる。一陣の風に煽られて、火の粉が舞い上がった。

途端、咆哮が上がった。獐猛な獣の断末魔のように鋭く、怨嗟のこもった人の叫びのようにおどろおどろしい。

祠を覆うように侵食領域が広がり、そして水球が生み出される。それまで燃え盛っていた火は一瞬にして消え去った。

やがて中の様子が明らかになる。何もない祠の中を全て埋め尽くすように、一匹の巨大な化け狐が存在していた。

その体は神と呼ばれるのに相応しいほどの美しさがあつた。体毛は艶やかで、七色に輝いている。その中でもっとも強い輝きを持つているのは金、あるいは黄色に近いものだろう。やけに大きく見えるのは百を超える尾が理由である。体の半分以上を占めるそれは、胴体と尾のどちらが本体であるか分からなくなるほど。

敵の姿が明らかになるや否や、すぐさま魔石に用意されていた条件がクリアされ、敵を認識、そして無数の鉄の槍が生み出され、化け狐へと発射される。

祠が見るも無残な姿へと変貌を遂げていく。が、土煙の中から化け狐はぬうっと現れた。時空魔法により固有時を進め、あたかも高速移動したかのようにして避けたのだろう。

だがそれとて、完全にこちらの攻撃が通らないわけではない。

「セラ、時空魔法を頼むよ。君がああ程度の者に、劣るはずはないから」

「はい。承知しておりますよ。エヴァン様という、無茶ばかりさせられるのですから」セラフィナは微笑みながら、時空魔法を発動させた。そしてエヴァンは悪魔の右腕を軽く振ると、カールが張りしこの世界を包んでいる大域的な侵食領域に干渉して自分自身にも効果を反映させる。この力を得る前にも同様の手段で彼女の魔法の恩恵に与っていたのだが、以前と比べると、遥かに強い影響を感じていた。

立ち読みサンプル はここまで

攻撃を続ける魔石から放たれる槍の動きがやけに遅くなる。これでは意味がない、とエヴァンは魔石の動きを止め、剣を抜く。変わらぬアイボリー色の輝きがあった。

敵の出方を窺っていると、化け狐は尾を振るわせた。炎のようなきらめきを振り撒きながら、一つ、二つと尻尾が離れていく。

それらはやがて一つの形を作り上げた。黄金色の髪、狐耳、尻尾。セラフィナとよく似た——かつて見た記憶の中のフィオナと似た姿。

だが、一つ一つは細部において異なっている。そして何より、人間によく似ているがゆえの不気味さが目立っていた。

(百代以上にも亘る、とはこういうことなのだろう)

エヴァンはかつて犠牲になった者たちの感情を慮るも、すぐにその考えを捨て去った。死者にしてやれることなど、何一つあるはずがないのだから。

表情のない少女、あるいは女性の姿が次々とかたどられていく中、エヴァンは侵食領域を魔石まで広げ、石の塊を多数撃ち出す。何も、敵が行動を終えるのを待っている必要などないのだ。

ようやく形を作られたばかりの人型がはじけ飛び、到底人のものとは思えぬ断末魔の叫びが響き渡る。

罪悪感こそなかったが、不快感は拭えない。命の冒涇に対する感情であったのかもしれ

